

idea

ニュースレター「アイデア」

2023.12

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

- 1 | 二言三言 | 岩瀬社会福祉士事務所 代表 岩瀬 城光さん(後編)
- 3 | 団体紹介 | 還過爺+αバンド
- 5 | 地域紹介 | 陳が森自治会(川崎)
- 7 | 企業紹介 | 協同組合 産直センターひがしやま(東山)
- 8 | 博識社のフクロウ博士 | 地域運営の落とし穴④ 交流事業にみる人材育成
- 9 | センターの自由研究 | 地名の謎ファイルNo.9「二関村②」



今月の表紙
 明治8年まで存在した「二関村」。「一関村」とともに「一関城下」を構成していました(前号参照)。そんな「一関城下」を見下ろすことができる現在の「釣山公園」は、藩主の居館(現在城内地区内)を見下ろす場所のため、庶民は入ることができなかったそうです。今月は百姓なのに商人の町「二関村」の具体的な生業にスポットを当ててみます。(自由研究)

idea
 発行 いちのせき市民活動センター
 せんまやサテライト 〒021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4F Tel 0191-26-6400 Fax 0191-26-6415
 〒029-0803 一関市千厩町千厩字町149 Tel 0191-48-3735 Fax 0191-48-3736
 ホームページ: https://www.center-i.org/ メール: center-i@tempo.onn.ne.jp

お知らせ

<p>情報 ◆ 日曜日限定「地場産カレー」販売中</p> <p>本誌「企業紹介」で紹介した「産直センターひがしやま」内「季節館食堂」では、日曜日限定で地元米と野菜・しいたけをふんだんに使った「地場産カレー」を提供中。白米と玄米から選べ、追加料金で、カレーが食べ放題(なくなり次第終了。13時半頃にはなくなるが多い)。詳しくは下記まで。※現在、同食堂は日曜日のみ営業。</p> <p>場所: 産直センターひがしやま内「季節館食堂」(東山町長坂字柴宿80-2) 料金: 一皿700円(小中高生は500円) 食べ放題は1,000円(小学生500円、中学生700円) 営業時間: 10時37分~15時37分(ラストオーダー15時) 問合せ: 0191-47-2919</p>	<p>イベント ◆ G・B Pop Jazzオーケストラ「第4回クリスマスコンサート」</p> <p>市内を中心に活動する市民ビッグバンド「G・B Pop Jazzオーケストラ」は、一足早いクリスマスコンサートを開催します。定番のクリスマスソングとジャズ曲のほか、誰もが聞いたことのある劇中伴奏音楽にチャレンジします。今年にはキーボードを充実させ、従来よりも厚いサウンドで会場を盛り上げます。詳しくは下記まで。</p> <p>日時: 2023年12月16日(土) 15時~16時 会場: イオンスーパーセンター一関店 フードコート内特設会場(一関市狐禅寺石ノ瀬11-1) 料金: 観覧無料(自由観覧) 問合せ: 090-7072-3855 (事務局・佐藤)</p>	<p>会員募集 ◆ 「絵手紙同好会」会員募集</p> <p>一関市千厩町を拠点に活動する「絵手紙同好会」では、一緒に楽しく活動する仲間を募集しています。現在の会員は60代~90代の8人ですが、会員の年齢、性別、居住地は不問です。月1回の定例活動日に各自作品を持ち寄り、お茶を飲みながら交流しています。作品は千厩町内の施設等にも展示(定例活動日に入れ替え作業も行っています。見学のみの参加も可能です。詳しくは下記まで。</p> <p>活動日時: 毎月第3火曜日 13時~(概ね2時間ほど) 活動場所: いちのせき市民活動センターせんまやサテライト内ホール(一関市千厩町千厩字町149) 会費: 1,000円/年 問合せ: 0191-52-2181(代表・白石)</p>
<p>会員募集 ◆ 「森林資源を活用する一関市民の会」会員募集</p> <p>山林から切り出した間伐材等の集材・加工を行い、地域の地産地消エネルギーとして資源循環させる活動に取り組む「森林資源を活用する一関市民の会」では、一緒に活動する仲間を募集しています。一関市民であれば、年齢、性別、経験の有無等は不問。会員特典に、作業用の各種安全器具、木材トングの支給等があるので、未経験者でも安心して活動できます。詳しくは下記まで。</p> <p>定例活動期間: 10月~3月 活動内容: 間伐材等の集材や搬出(搬出した木材は薪や燃料チップに加工) 会費: 3,000円/年 問合せ: 070-4345-2244 (事務局・千田)</p>	<p>情報 ◆ 「布佐神楽保存会」出演依頼承ります</p> <p>一関市川崎町を拠点に活動する「布佐神楽保存会」では、岩手県無形民俗文化財に指定されている「布佐神楽」の伝承活動を行っています。布佐神楽は150年以上の歴史がある川崎地域唯一の郷土芸能で、地元神社の例大祭での奉納や布佐神楽発表会等で披露するほか、地域のイベントなどで出演依頼があれば承っています(料金等は要相談)。詳しくは下記まで。</p> <p>出演内容: 「布佐神楽」の披露 ※現在披露可能な演目数は約20 問合せ: 0191-43-2767 (事務局・千葉)</p>	<p>情報 ◆ 令和5年度「全国わんこもち大会」開催見送り</p> <p>毎年2月に開催している「岩手・一関全国わんこもち大会」は、市内の高校生が実行委員として企画準備及び当日の運営を行っています。令和5年度においては、諸般の事情により、開催を見送ることといたしました。例年多大なるご協力をいただいている企業・団体、関係各所の皆様、参加を検討されている皆様にはご迷惑をおかけいたしますが、ご理解のほど、よろしく願いたします。</p> <p>問合せ: 0191-48-3735 (岩手・一関全国わんこもち大会実行委員会事務局(いちのせき市民活動センターせんまやサテライト内))</p>

まちの写真展

スタッフがまちの1コマを切り取ります。



作品名 「橋の上にも鮎」

平成5年施工の「西前橋(一関市東山町松川字卯入道)」。岩手県道28号東山薄衣線を通る砂鉄川に架かる橋で、欄干には「鮎」のレリーフが！鮎漁が解禁になる7月上旬から9月中旬までのシーズン中、砂鉄川は鮎釣り愛好家で賑わいを見せます。



旧町村別の人口動態等を共有します。

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	53977	6	24550	32
花泉	11892	-29	4695	-5
川崎	3213	2	1275	1
千厩	9753	-25	4087	-11
大東	11798	-25	4899	-6
東山	5829	-6	2271	1
室根	4353	3	1796	2
藤沢	7020	-21	2766	-4
一関市全体	人口 107835	-95	世帯数 46339	10
	出生数 43	6		

2023年11月1日付
 (2023年10月31日現在
 住民基本台帳より)
 ※外国人登録者含む

175 / 107,835
岩 渕 城 光

市内福祉施設に勤務する傍ら、令和2年に「岩渕社会福祉士事務所」を開業し、成年後見活動等を行う(岩手県社会福祉士会が運営する成年後見人等の登録機関「ばあとなあ岩手」に在籍)。令和5年で福祉施設を退職、成年後見人活動を中心に、「あかり食堂運営委員会」代表や「大原地区福祉活動推進協議会」事務局も担う。昭和58年、大東町大原生まれ(在住)。



厚生労働省のHPでは成年後見制度に関する各種パンフレットがダウンロード可能。「後犬ちゃん」というPRキャラクターも。

第112回 岩渕社会福祉士事務所 代表 岩渕城光 × いちのせき市民活動センター センター長 小野寺浩樹

「成年後見制度」で得る「安心」 ～本人の「権利」を守るために【後編】～

認知症、知的障害、精神障害などの理由で判断能力が不十分な方は、不動産や預貯金などの財産管理、介護サービス等の契約が自分では難しく、自分に不利益な契約を結び、悪徳商法の被害にあう恐れも。そのような方を保護し、支援する「成年後見制度」ですが、制度の正しい理解が進んでいないのが現実です。具体的な制度活用のイメージを、広く市民が持つことが求められています(2回シリーズの後編)。

小野寺 岩渕さんは介護の現場での勤務歴もあります。後見人制度が必要だという利用者さんも見てきましたか？

岩渕 重度の認知症で、もう判断能力がないという人はいましたが、私の担当する中には、後見人がついて利用者はいませんでした。身内が手続きや通帳管理をしてくれるので、制度を使うに至らないのですが、厳密に言えば後見人が必要なケースがあったかもしれません。家族と言えども、本人名での契約や、通帳の出し入れを自由にできるわけではないので……。

小野寺 親族が後見人になるケースも多いようですが？

岩渕 過去には多かったのですが、最近は専門職が選任されることが増えているようです。親族は本人のことを最も理解している立場だと思いますが、親族が後見人になると、本人の意思を尊重する場面で家族の意向と

相違した場合に葛藤が生じたり、財産管理が本人分と家族分と明確に分けることが難しくなったりと、本人の権利を守る制度のほが、関係が近すぎるがゆえの課題が見えてきたためです。

小野寺 「家族が看る」というのが世の中の当たり前みたいになつていますが、家族だからこそ、個人の領域を犯してしまうことがあるんですよ。

岩渕 「自分の親」であっても、客観的な視点で関わることが必要なんです。

小野寺 ちなみに後見人は普段はどんな活動を？

岩渕 私の場合、所属する社会福祉士会のルールに則り、月に1回は本人と面談します。ケアマネのように本人のもとに向いていき、現在の様子や本人の意向を確認しながら、それに合わせた生活ができるようにコーディネートします。

という考え方は本来の制度の趣旨と異なるわけです。

小野寺 制度があるなら、お金を払ってでも押し付けたいと考えてしまう人もいるでしょうが、あくまでも「本人の権利」を守るための制度であつて。この制度によって親族関係が希薄になつてしまつたら、本末転倒ですよ。

岩渕 介護サイドの人たちと連携し、手続きや支払いなどの事務的な部分で、「本人にはできないから後見人をお願いしたい」というように、生活の一部を担う立場しかありません。でも逆に、この部分は後見人しかできない立場でもあります。

小野寺 大事なものは、家族や親族含め、「みんなで支えていく」ということ。手続きなどに関しては後見人制度などを利用してすることで、第3者の介入を得られるので、支え合いの手を増やして、上手にやっつけていきたいと思います。

岩渕社会福祉士事務所
電話 090-2028-5925

一関市成年後見支援センター(長寿社会課内)
電話 01911218370

小野寺 財産管理などは？

岩渕 ケースバイケースですが、口座引き落とししてあれば、銀行で記帳して確認したり、施設入居者であれば、施設に預けておく小口の残高を確認して補充したり。後見人に選任された直後は銀行に後見人になった届け出をして、引き出しできる状態にしたり、年金事務所等にも届け出をして、ハガキなどの送付先を後見人宛に変更する場合があります。

小野寺 郵便物の送付先変更は大事かもしれないですね。

岩渕 在宅で一人暮らしの認知症の方だと、郵便物の管理ができないことが多いので。家庭裁判所の許可を得れば、年金ハガキだけでなく、郵便物全般の回送をすることができます。

小野寺 それは安心ですね。

岩渕 なので、遠方に住む親族が、「できれば看たいけど、日常的には看ることができない」という理由で、後見人を申し立てるケースもあります。

小野寺 実家の親に安全に暮らしてもらうために、後見人身上監護をしよう……確かにニーズは多いですよ。

岩渕 ただ、「医療同意」など、後見人にもできない行為があり、「後見人に任せているから一切関わらなくて良い」というわけではありません。

小野寺 医療同意が必要になった時にはどうするんですか？

岩渕 親族に連絡をとって、協力をお願いします。同様に後見人は本人が存命中の代理人なので、ご臨終となった瞬間に役目を終えます。なので、死亡診断が告知されたタイミングで元後見人となり、速やかに預かつていた通帳や財産のまとめをし、相続人に引き継ぐ段取りをしなればいけません。

小野寺 そうなんですか！死亡届や火葬許可などの手続きはできないということですか？

岩渕 義務はないんですが、親族ができない場合は、家庭裁判所に死後事務の許可を取ることで、期限の迫った請求の支

※2 「相続財産管理人の選任申立て」。相続人の存在・不存在が明らかでないときや、相続人全員が相続放棄をし、結果として相続者がいなくなった場合などに、申立てを行い、家庭裁判所に相続財産の管理人を選任してもらうこと。

※1 弁護士・司法書士・社会福祉士等。前編参照。

団体紹介

還過爺+αバンド

高齢者福祉施設への演奏ボランティア活動や、各種地域イベントでのバンド演奏を通じて、地域住民の「健康長寿」に貢献すること目的に活動中。ボーカル、ドラム、キーボード、ベース、リードギター、サイドギターの6パート(6人)体制。

TEL 0191-63-2604(事務局:小野寺)
写真:せんまや夜市「夜市ライブ」での演奏(令和5年5月)



若かりし頃の「感覚」を取り戻しながら

火曜日の夜、一関市藤沢市民センターに手際よく運び込まれる楽器やアンプ。セッティングを終えると、ドラムスティックの音を合図に演奏が始まります。

ドラムを担当するのは会長の小野寺栄一さん。楽器経験はあるものの、ドラムは未経験で、ほかのメンバーも結成時には約40年のブランクがあり、「ほぼ一からのスタートだった」のだから。「ギターの指づかいを取り戻すまで半年はかかりましたね」と、事務局(ベース)の小野寺東さんは振り返ります。

還暦を過ぎた男性4人で「還過爺バンド」を結成し、結成後もなく、還暦に至っていない女性メンバーが加わったことで「還過爺+αバンド」となった同会(ボーカルとキーボードの女性以外は60歳超え・平均年齢65歳)。コロナ禍でも休むことなく、週1回約1時間半の練習を続けています。

かんかじいプラスアルファバンド

還過爺+αバンド

飲み会を機に結成した地域貢献バンド

バンド結成のきっかけは同級生3人(栄一さん、東さん、千葉秀一さん)の飲み会でのこと。3人は20代後半に3〜4年程「藤沢軽音楽同好会」というバンドを組んでいました。藤沢町内で中高生時代に吹奏楽を経験していた若者が集まり、ビッグバンド形式で歌謡曲やジャズ、ポップスやラテンなど様々なジャンルの楽曲を演奏するバンドで、メンバーは15名ほど。

町内での定期演奏会の開催や、県内のビッグバンドが集うイベントに参加するなど、活発に活動していましたが、仕事や家庭に忙しい年代に入ったことで、バンドは自然消滅しました。

バンド活動はなくなったものの、同級生の飲み会で時々顔を合わせていた3人。66歳の時、東さんから「定年を迎えて何かと今までの時間に余裕がある。一緒にバンドを結成してみないか?」という提案が。楽器演奏のブランクや、

体力面の不安もありましたが、「バンド結成」に対する楽しみな気持ちが勝り、「やってみるか」と話が進みました。

平成29年6月、ジャンルにとらわれず、演奏を楽しむバンドとして「還過爺バンド」を結成。かつてのビッグバンド仲間・佐藤光雄さんをリードギターとして迎え入れ、4人での活動がスタートしました。

スタートとともに4人が検討したのはバンドの方向性。趣味の域に留めず、活動の目的・やりがいとして、高齢者福祉施設等への演奏ボランティアを主軸にしていくことに。「歌を聴いたり、歌うことで脳の血行がよくなると言われていて、歌詞を覚えれば記憶力のトレーニングにもなる。思い出の曲で昔の出来事を思い出すことができれば、脳が活性化する」という、歌の力を活かしたいという想いからの選択でした。結成から約8か月後の平成30年2月、初のミニコンサート開催を皮切りに、周辺地域のデイサービスセンターや老人ホームに積極的に声をかけ、演奏ボランティアを重ねます。当初は「売込み」形式でしたが、ボランティア団体として認知されると、施設側から「呼ばれる」ようになりました。

歌謡曲や演歌、ポップス、メンバー

思い出を呼び起こし、思い出を作る

が幼少のころから憧れていた「ザ・ベンチャーズ」の曲など演奏ジャンルは様々。「お年寄りの方の前で演奏するとなると、往年の曲を披露することが多くなりますね」と、聴衆に合わせて曲選びをしています。

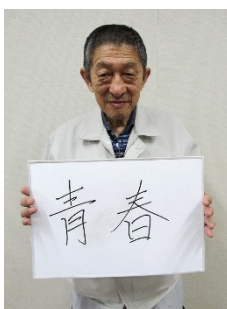
今だから実現できた「夢」

「子どもの頃からベンチャーズのエレキギターなどに憧れてきたけど、当時は高価だったからね。やっとギターを手に入れ、ビッグバンドを始めると働き盛りの年代になってからは忙しくて……。今になってあの頃の夢を叶えることができた」と、活動の喜びを語るメンバーたち。「一人ひとりが音を奏でることに対して、楽しみ、面白味を感じて、一回一回の稽古の奥深さを感じる事が大事かと思っています」と、東さんが続けます。

平成31年から「藤沢町芸術文化協会」に登録し、「藤沢芸協チャリティショー(収益金は一関市社会福祉協議会藤沢支部へ)」等にも出演。「聴

Q.バンド活動の「魅力(楽しみ)」は?

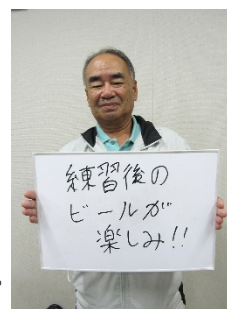
会長(ドラム)



A. 青春

おの でら えい い ち
小野寺 栄一さん
小学生の時にウクレレを弾き始めて以来、トランペットなど様々な楽器を経験。今は同会結成を機に始めたドラムの腕を磨いています。

事務局(ベース)



A. 練習後のビールが楽しみ!!

おの でら あ ず ま
小野寺 東さん
ビッグバンド時代からベースを担当。趣味でスピーカーを集めており、音響設置も担当。機材のトラブルに対応することも。

いてくれる人も元気に、演奏する我々も元気に」をモットーに、各所で懐かしいメロディを響かせながら、地域の芸術文化活動や福祉活動に参画し続けます。

- Photo



演奏機会を開拓して
コロナ禍以降、演奏機会が減ったため、イベント等には積極的に参加。「いちのせき市民フェスタ23」での演奏の様子。



「藤沢野焼祭」にて
平成30年の初出演を機に、野焼祭の特設ステージにも継続出演。写真は3年ぶりに開催された令和4年度の野焼祭での演奏。

gallery -



チャリティショー
過去2回「藤沢町芸術文化協会」主催のチャリティショーに参加。藤沢文化センターのステージを盛り上げます。



普段の練習風景
毎週火曜日の練習。音出しに始まり、楽曲毎の練習はもろろのこと、本番に向けての機材類のチェックも怠りません。

地域紹介

陳が森自治会(薄衣)

薄衣地区に位置し、小字は一関市立川崎中学校等も立地する上段、大池、堀田、鴨地(一部)、陳が森、唐蓬、北新山(一部)で、35世帯、約95人が暮らす。総務部、産業部、教育文化部、体育厚生部、女性部、社会部で構成。



左の写真：令和5年度「収穫祭」でのひとこま

「不便さ」を越えた「暮らしやすさ」を

不便な傾斜地に暮らし続ける理由

川崎地域内でも傾斜地に位置している陳が森自治会。道も狭く、重機が入りにくいため、開拓するにも難儀な土地でした。それでも元和年間(1615〜24)に立てられたお墓があったり、15代程続く家もあるなど、古くからの土地に暮らしがあり、その背景にあるのは水害です。水害で移転してきた家も少なくなく、北上川で水害が発生した際には、陳が森地内の市道が迂回路となっており、水害対策として開拓・移転が行われてきた集落だったようです。

「道が狭く傾斜地なため、なにかと生活するには苦労があるが、人口や世帯数は他集落と比較しても大きな変化はなく、むしろ一関市立川崎小学校に通学しやすいために、帰郷して子育てをする若い世代もいます」と、自治会長の伊藤峰雄さんが語るように、人口約95人のうち、20歳以下の人口は約15人、小学生も5人おり、割合は

陳が森自治会

川崎

少なくありません。なお、全国的に「陳が森」という地名は少なくないですが、当地は「陣」ではなく「陳」。由来は不明ですが、80代の住人に聞くと「じのもり」と呼ばれていた時期もあったとか…。「豊臣秀吉側の武士が逃げ延びてきた」という伝えもあるとのこと、由来も含め、歴史ロマンを感じさせます。

自治会推進目標に即した自治会運営

そんな陳が森に自治会が発足した時期は定かではありませんが、約50年前から、総会資料には「自治会推進目標」が掲げられています。そこには「自治会員一同は、地域住民の福祉向上と自治意識の向上を図るとともに、環境の整備や地域の特殊性を生かした、住民一人一人の意思を大切にし、自らの新しい集落を創造し、実情に即した自治会づくりを目標とする」とあり、この目標に即した9つの事業にぶら下がる形で、各部

会が具体的な事業を行います。例えば「特に健康に重視し、健康に対する調査研修を行う」という事業を推進する社会部では、年数回「生き生きサロン」として、自治会の集会所(陳が森公民館)で「健康教室」など、サロン活動を開催。約15名が参加しており、サロンの参加者からは「昔から隣近所の付き合いはよく、昔からの顔なじみや幼馴染など、平日頃から相談できる人がいる環境はとても住みやすい」「自治会に合った事業を展開してくれるのでありがたい」と、サロン開催への感謝の声が聞かれます。

体育厚生部は「市及び各関係機関団体等の主催する事業、及びリーダー研修会には積極的に参加する」という事業を推進すべく、川崎地域全体で開催される各種事業にも積極的に参加しています。川崎体育協会主催の「川崎町バレーボール選手権大会」には毎年参加しており、令和4年度は優勝！毎年9月に開催される市内外から50以上のチームが集まる「北上川流域交流Eポート大会」でも何度も成績上位に名を残し、世帯数が倍以上ある自治会を抑えて活躍しています。

こうした事業の人選は、部会代表(6人)と班長(4人)で、名簿を見ながら選

出しており、選出された人は「仕事がない限り、基本的にはみんな参加してくれる」のとか。「少数精鋭で、自分たちができる範囲で無理なく続けることが大切」と、伊藤さんはその活躍の理由を語ります。

集まる楽しさを感じて

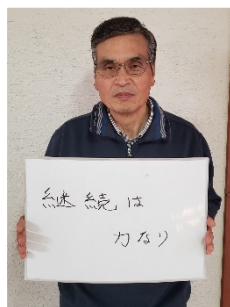
同自治会が最も大事にしているのが社会部・女性部・教育文化部が協力して行う「三世代間交流」。子どもたちと一緒に果報だんごを作る「果報だんごの会」は、同年代・世代間の交流の場を創出しています。

また、社会部・教育文化部が中心となり、各種野菜の栽培も行っています。が、「子ども農園」として子どもたちもサツマイモを栽培しています。10月の収穫の際には祖父母も手伝うなど、自然な交流が。同時期には社会部が栽培した里芋を使った芋の子汁をいただく「収穫祭」も開催し、交流を楽しみます。その他、「しめ縄づくり」「門松づくり」など、世代間交流だけでなく、地域文化の継承にもつながる事業が盛りだくさんです。

伊藤さんは、「仕事や子育ての事情が変わり、自治会活動など難しくなっ

Q.集落の自慢は何ですか？

自治会長



A. 継続は力なり

伊藤 峰雄さん

30代中頃から会計を担い、自治会長は3期6年目。生まれも育ちも陳が森で、元気な先輩たちに負けないよう、世代間交流の場づくりなど常に工夫を凝らしています。

副会長



A. 平穏な毎日

伊藤 秀一さん

3期6年目。伊藤さん同様、生まれも育ちも陳が森。国道284号線沿いに、たい焼きや大判焼きなどの軽食を提供する「きまぐれキッチン」を運営しています。

できているが、何かを寄り集まって行うことの楽しさも伝えていきたい。集まる理由は何でも良い。資源回収や草刈りなどを通して集まれる。集まりながら交流できればいい」と、これからのコミュニティ活動のあり方を見据えています。

- Photo gallery -



傾斜地ですが……
同自治会地内の最大高低差(北新山と上段)は100m以上。不便さはありますが、立地自体は悪くありません。



果報だんごの会
毎年11月末に開催。社会部・女性部が協力し、子どもたちと一緒に作った果報だんごは、神棚に供えてからいただきます。



芋の子汁でカンパイ
収穫祭で提供する芋の子汁は「おばあちゃんたちの味」として喜ばれています。子どもたちが遊びに来たことも。



にぎやかなサロン活動
サロンでは、市体育協会や工房てんとう虫等と連携して行う事業も。女性部と社会部(非老人クラブ)が共同で運営中。

東山 協同組合 産直センターひがしやま

平成6年、「東山町農協青年部」が主体となり、今後の地域農業について議論する中から生まれた簡易直売施設「JAひがしやま青年部産直センターひがしやま」。その後、東山町やJAいわい東(東山中央支所)の支援で、現在地に産直施設の建設が決まり、平成8年、任意団体「産直センターひがしやま生産組合」を設立。販売部門・生産部門・加工部門の3本柱で運営を開始。平成11年に法人化、現在名称となり、共同施設の管理運営に関する事業、共同購買事業、共同加工事業等を行う。平成24年には、一関市と「災害時における応急食料等の確保に関する協定」を締結し、地域の食材供給拠点も担っています。

「顔の見える食」の供給と交流で、地産地消を

「協同組合産直センターひがしやま」は、直売所(愛称「季節館」)での地場農産物や農産加工品の製造・販売、学校給食への食材供給、食堂運営のほか、伝統食の加工や新たな加工食品開発にも取り組み、地場農産物の付加価値化に取り組んでいます。また、併設する町営柴宿駅前駐車場(季節館駐車場)及び東山町公衆便所の管理も担っています。

きっかけは平成5年の凶作とコメ市場開放(「平成の米騒動」)。今後の農業を考える中で、東山町農協青年部が産地直売施設の展開を打ち出します。産直という言葉が浸透していない時代に、農家1軒1軒を回りながら説得。賛同者45人を確保すると、平成6年、出資金3万円で簡易産直施設(3坪のプレハブ2棟)を建設、スタートさせたのです。

産直は翌年には軌道に乗り、新築移転、組合化(任意団体)、法人化もしますが、雇用者1名に、生産者(産直ひがしやま互助会)が輪番で売店に立つ仕組みが長年続きました。

そこで平成16年、現代表理事の前田眞さんが、監事を経て二代目代表理事に就任した際に店舗運営の体制

「作る喜び」「売る喜び」
努力の積み重ねで30年

を整理。前田さんは「自らが生産した農産物を自ら売ること、高齢者や主婦がやる気や生きがいを見つけ、互いに刺激し合うことで30年も続けてこれたのかな」と振り返ります。

「加工」も充実 家庭的な産直として

同組合の「加工部門」は、設立時から「手づくり伝承の会」が核となり、農産物加工品の研究開発を行っています(食堂も展開)。平成16年には加工品を製造する加工施設「あじやら味善」を設置。地元産のもち米や小豆を使用したあんこなどの餅料理、大福、饅頭、漬物、惣菜などを製造し、地域の台所としてなくてはならない存在です。

特に、高齢化が進む柴宿団地、旧雇用促進住宅などが近くにある同館は、団地住まいの一人暮らし高齢者等が、昼時や夕方に徒歩で惣菜を買いに来るのだとか。「そういった消費者の信頼にも応えたい」という一



- 1 代表理事前田眞さん。平成3年に移住しりんご農家を営む。
- 2 一人暮らし用に惣菜は少量販売。
- 3 稲藁やもみ殻、薪、燐炭、肥料等も取り扱う。

DATA
〒029-0302
一関市東山町長坂字柴宿80-2
TEL 0191-47-2919
FAX 0191-47-3301
HP <https://h-kisetsukan.com/>

方、「設立当初から一緒に頑張ってきた世代が、今や80〜90代になっている。今後は農家を辞める家も少なくなだろう」と、生産者減による商品減も危惧しています。

平成26年の組合員93名をピークに、現在は73名(令和5年10月現在)。退会者は毎年ありますが、新規加入者は令和4年度以降ゼロ。それでも前田さんは「産直は原料から製造に至る全ての段階で顔の見える供給が可能であり、生産者と消費者が直接対話し、信頼関係が維持できることが強み。30年前に直面した『将来の地域農業への不安』から組合が発足したが、新たな課題と向き合い更なる挑戦も必要」と前を向きます。

地場産品を常時取り扱うことから、令和3年には「一関市地産地消モデル店」にも認定された同館。「消費者に安全安心な地元の農産物を提供し、消費者の信頼を大切にする店づくり」をモットーに、「素朴で家庭的」な産直を貫いていきます。

今月のテーマ

地域運営の落とし穴④
「交流事業にみる
人材育成」



「自治会対抗バレーボール大会」が育てる「人間力」

新型コロナウイルス感染症が5類に移行した5月以降、大小様々な「イベント事業」が各地で多数開催され、良い意味で「交流」が盛んに行われています。半面、少子化、高齢化、人口減少の影響が目に見えて現れるようになり、夏祭りのような大規模なイベントは、踊りや神輿等に関わる世代(生産年齢人口)の減少で、かつての温度感は維持できていないように見受けられます。地域の「イベント事業」も復活してはいるものの、人口減少で規模が小さくなり、運営側も高齢化により苦しい状況が……(第53話参照)。

そんな中、大東町で「一関市大東ママさんパパさんバレーボール大会」が4年ぶりに開かれた(10月8日)のですが、エントリー数は30チームと、全盛期の参加チーム数(最高268チーム)から比べ10分の1に。この現状を受け、運営側が今後の継続について慎重になっていると聞き、その現場を見に行ってきました。

大東町は「バレーボールのまち」として全国でも有名で、各自治会館にはバレーボールコート(だいたい屋外)があり、大会前1〜2か月は、仕事後(夜間)に練習する姿が当たり前だったようです。昭和40年代、「農婦症(農作業からくる腰痛や肩こりなど)」の解消対策のために興田地区で始まり、間もなく大東町全体での取り組みとなりました。東京オリンピックで女子バレーボールが優勝し、東洋の魔女ブームにあやかっただというエピソードもあるようですが、バレーボール大会がこれほどまでに普及した背景を、地区民運動会と比較しながら分析してみました。

地区民運動会もバレーボール大会も、どちらも自治会対抗で行われることが多いですが、地区民運動会は、集落の陣地に集合し開会式に参加、そしてプログラムに沿った競技に参加していくもので、例えば50m走であれば、選手がスタート前に集まり、整列しスタート。走り終えれば商品を買って終わり。ボール送りなど他の競技も同様です。一方、バレーボール大会は、試合前にコートに整列し、対戦相手と礼をし、それぞれのポジションへ。試合後は、コートに整列し、礼をして終わります。相手チームと握手をしたりもします。この時点で、運動会とバレーボール大会の違いが!

それは「試合(参加)に臨む姿勢」です。地区民運動会もバレーボール大会も、参加することに意義があるとは言うものの、ただ「参加」するのと「礼をしてから参加する」のでは、所作の違いにもものすごく差を感じました。また、バレーボールの場合、試合時間も長いので、チーム内でのコミュニケーション、自治会としてのコミュニケーションも重要で、声を掛け合う、応援することで、試合時間が進めば進むほど熱が入ります。プレーしている選手たちは、ミスをしてカバーしあい、年代の壁も認め合い、まさに多様性が実現されています。

「交流事業」の意味・意義は、幅広いものではありませんが、このように「人を育てる場面」として分析できるとは思っていませんでした。

「人が集う交流の中には、様々な学びがある」とはよく言うものの、社会性、所作など、「人を育てる場」が「交流事業」なのです。ただ楽しむ事業ではなく、交流事業を通じて人を知り、関係性を構築していく。

大東地域に限らず、当市内で開催されている自治会対抗のバレーボール大会は、自治会の縮小もあり、参加チームは激減していますが、個の時代と言われる今、このような「ちょっとした強制力」をもって、「みんなが集い、認め合う場」を作っていないと、人が育ちません。「ちょっとした強制力」が難しいけれど、ここを頑張っていないと、これからの時代、地域住民間の関係性は薄くなる一方で、やばいなと感じてしまいます。

人が多かった時代に築き上げたものは多々ありますが、根っこにあったのは、「コミュニケーション機会を創ること」だったんだと思います。「人が少ないからできない」のではなく、「少ない人でコミュニケーションが取れるようにしていく」ことが大事ですね。



令和5年度の「一関市大東ママさんパパさんバレーボール大会」にて。「大東グラウンド」に特設バレーボールコート(10面設置)して開催(かつては20面以上設置)。各チーム(自治会)のユニフォームには自治会名がしっかり入り、自治会を背負って戦います。また、他出者も「ふるさと選手」として2名まで参加が認められており、ふるさと選手の証として左腕に腕章をつけています(写真の彼もふるさと選手)。

「二関村」の「生業」を調べてみた

「百姓」として、農業の合間に「商売」を行っていた二関村の村人たちは、はたしてどのような「商売」を行っていたのか、大島晃一著『一関藩の研究／北奥近世資料の研究』の中で大島氏が明治3年・4年の史料等を元に作成した「大町並図」を参考に、家業(生業)のみを書き出してみました(下図)。

地域の「気になること」をセンタースタッフが独自に調査!

センターの自由研究

明治3～4年の大町に展開していた職種

- 【衣料品】古着屋、木綿屋、麻屋など
- 【食料品】米問屋、塩問屋、味噌屋、醤油屋、五十集屋(魚屋)、八百屋、麴屋、豆腐屋、麴類屋、菓子屋など
- 【日用雑貨】荒物屋、小問物屋、古道具屋、蠟燭屋、瀬戸物屋、煙草屋、鍋屋、薬種屋、打綿屋、網屋など
- 【接客業】旅籠屋、煮売茶屋、濁酒屋、質屋、髪結、湯屋(銭湯)など
- 【職人】矢師、畳屋、馬具屋、飾屋、桶屋、染屋、仕立屋、足駄屋、砂官など
- 【その他】馬の売買・周旋

◀大島氏の作成した図を参考に、明治3年・4年に大町に存在した職業を書き出したものです。様々な職種がありますが、基本的には「農村生活に直結する」ものです。「職人」が少ないように感じられますが、城下東端の「職人町」に集住しているためなのだとか。

なお、下図で水色に色付けした店舗(①②③)は明治3年時点から変わっていない店です。①の「薬種店」は、現在も薬を扱う「自然薬佐久」。当時の戸主名は「佐藤久基吉」です。②の「五十集屋(いさばや)」は、鮮魚・割烹の「富澤」で、当時の戸主名は「富沢和右衛門」。③の「古道具屋」は、「千葉新家具店」で、当時の戸主名は「千葉新作」です。ちなみに上記3店舗に「二関村を知っているか」というヒアリングをしてみたところ、いずれも「知らない」という回答でした。

下図で黄色に色付けしたのは「④大肝入役所」、「⑤御代官役所」、そして西磐井地域でも主要な「⑥塩問屋」だった「佐藤弥三郎」の町屋敷です。

各村には村肝入がおかれませんが、村肝入の上には一郡を支配する大肝入がおかれ、藩の代官がそれを監督します(二関村の村肝入は上記「塩問屋」の佐藤弥三郎)。大肝入は大庄屋とも呼ばれ、在地の有力者です(村肝入<大肝入<代官という関係性)。二関村は天和2年(1682)より一関藩ですが、一関藩の「大肝入役所」が二関村に置かれていました(④)。

さらに、地方には「代官所」がおかれ、そこに代官がいて、御郡奉行の政務を代行しましたが、一関藩の「御代官役所(西岩井)」も二関村に置かれていました(⑤)。*代官所は、江戸幕府の終焉とともにその役目を終え、地主に返還されていますが、今回はあえてそのまま記載。



明治末期の大町通り。『写真記録集 一関の年輪Ⅱ 20世紀の一関』より(一関の年輪刊行委員会(2000))。

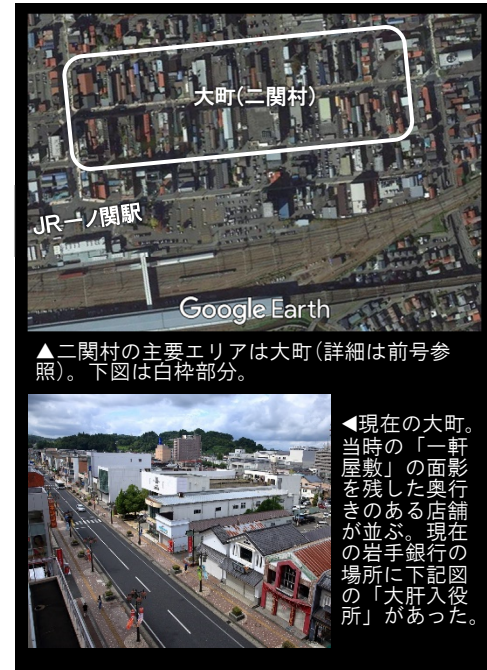
右図は「⑥塩問屋・佐藤弥三郎」の明治期以降の町屋敷(※)です。前号で紹介したように、「一軒屋敷」と呼ばれる間口が狭く奥行のある屋敷割だったため、各屋敷は右図のように細長く、江戸時代には【表店、居住区画、井戸・厠、土蔵】という構成でした。弥三郎は明治期以降に味噌・醤油の醸造を生業として本格化させたため、裏門側に醤油蔵などが付設されています。弥三郎は北上川流域エリアの塩問屋の中でも力のある人物だったようです。

右図は「⑥塩問屋・佐藤弥三郎」の明治期以降の町屋敷(※)です。前号で紹介したように、「一軒屋敷」と呼ばれる間口が狭く奥行のある屋敷割だったため、各屋敷は右図のように細長く、江戸時代には【表店、居住区画、井戸・厠、土蔵】という構成でした。弥三郎は明治期以降に味噌・醤油の醸造を生業として本格化させたため、裏門側に醤油蔵などが付設されています。弥三郎は北上川流域エリアの塩問屋の中でも力のある人物だったようです。

地名の謎 ファイルNo.9 「二関村②」

ミッション 81

江戸期～明治8年まで存在した「二関(にのせき)村」。現在「二関」と呼ばれる場所は存在していないため、大字として残っている「三関(村)」に対し、当該地域に暮らす人ですら、その存在を知らない人が多いようです。その実態を知るべく、前号では二関村のエリアを現在地図に落としてみました。今月は二関村のメインエリア(=現在の町)にスポットを当て、二関村民の生業から、暮らしの様子に想いを馳せてみます。
※記載内容はあくまでも独自調査の結果です。



▲二関村の主要エリアは大町(詳細は前号参照)。下図は白枠部分。



◀現在の町。大町の「一面影行舗」の裏に「御代官役所」の跡地がある。銀行の裏手に「大肝入」の跡地がある。当屋敷をききかたの場所の「大肝入」の跡地がある。

「農閑余業」で生計を立てる
前号で紹介した通り、二関村に関する史料はほとんど残されていませんが、一関村・二関村と「一関城下」を構成していたとされ、二関村は現在の町が中心地であり、奥州街道が通っていた。その両沿いには隙間なく住居が連なっており、町屋敷数は寛文13年(1673)で63軒、幕末期には113軒です。
二関村は仙台藩領時代に「在町(在郷町)」として作られました。仙台藩では、仙台以外の町は農村と同様に群奉行の支配下に置かれたため(在町)、「一関城下」の二関村民も、田畑を有し、年貢負担の義務を負っていました(身分は「百姓」)。
しかし、商品生産・貨幣経済の発達とともに、兼業農家化し、「農閑余業」に勤む家が増加。そもそも二関村には零細な農地しかなく、専業農家であっても「自作・小作でようやく生活を維持する程度」だったのだとか。そのため、「兼業農家の大部分は余業によって専業農家以上の生活」をしていたそうです。実際、どのような「余業」を行っていたのか、下図と左頁で紹介します。

荒物・餅菓子屋(荒物)	湯屋(銭湯)	米問屋・茶屋(米問屋)	荒物・瀬戸・染屋(荒物・染師)	煙草屋(純農)	本麴屋(糸綿)	髪付屋(髪付油)	米問屋・白麻屋(米問屋・食塩問屋)	煙草屋(煙草)	菓子屋(菓子)	農業一通(純農)	塩問屋・五十集屋(肴)	餅菓子屋(餅菓子)	荒物屋(荒物)	仕立屋・白米屋(仕立師・米問屋)	豆腐屋(豆腐)	農業一通(純農)	荒物屋(荒物)	農業一通(旅籠)	本麴・鍋問屋(本麴・食塩)	米問屋(米問屋)	農業一通(不明)	農業一通(古衣・砂糖)	農業一通(古衣・砂糖)	煙草屋(煙草)	煙草屋(煙草)	不明(古衣)	薬種店(薬店)	五十集屋(干魚)	茶屋・濁酒屋(煮売)	茶屋(煮売)	打綿屋(糸綿)	大豆屋(豆腐・干物)	小問物屋(小問物)	瀬戸・荒物屋(白麻・瀬戸物類)	綿打職(純農)	農業一通(煙草)	木綿・古着屋(木綿・古手物)	五十集屋(五十集)	砂官職(塩問屋)	小問物屋(小問物)	荒物屋(荒物・白米)	木綿・古着屋(砂糖・古衣)	不明(白麻・荒物)	木綿・古着屋(木綿・古手物)	味噌・質屋(不明)	塩米・醤油古着屋(塩・醤油・木綿)	不明(白麻・荒物)	不明(米問屋)	塩問屋・茶屋(塩問屋・綿・煮売)	小問物屋(小問物)	蠟燭・髪付屋(小問物)	綿屋(小問物)	木綿・古着屋(呉服・古手物)	燈油・旅籠屋(旅籠)	不明(農)	不明(農)	農業(煮売)	農業(農・駄賃取)	煙草屋(綿)	米問屋・鍋屋(穀問屋・鍋)	旅籠屋(旅籠)	菓子屋(菓子)	醤油・荒物屋(荒物)	大肝入役所	米問屋(米問屋)	荒物屋(米問屋)	足駄屋(足駄)	農業一通(豆腐)	農業一通(不明)	農業一通(純農)	荒物屋(荒物)	茶屋(煮売)	米・塩問屋(米・塩問屋)	不明(不明)	間屋場	間屋場(農業一通(純農))	五十集屋(糸綿・本麴)	農業一通(米問屋・荒物)	麺類屋(うどん)	農業一通(純農)	矢師(不明)	髪結(髪結)	農業一通(馬喰)	畳屋(畳刺)	旅籠屋(旅籠)	農業一通(純農)	農業一通(純農)	馬具屋(馬具師)	瀬戸物屋(瀬戸物)	古着屋(古衣)	菓子屋(菓子)	米問屋(不明)	鍋屋(瀬戸接ぎ)	飾屋(飾師)	干物・八百屋(干物)	農業一通(豆腐)	古着屋(古衣)	白麻屋(白麻・荒物)	農業一通(純農)	煙草屋(煙草)	白麻・古道具屋(綿・砂糖)	瀬戸・荒物屋
-------------	--------	-------------	-----------------	---------	---------	----------	-------------------	---------	---------	----------	-------------	-----------	---------	------------------	---------	----------	---------	----------	---------------	----------	----------	-------------	-------------	---------	---------	--------	---------	----------	------------	--------	---------	------------	-----------	-----------------	---------	----------	----------------	-----------	----------	-----------	------------	---------------	-----------	----------------	-----------	-------------------	-----------	---------	------------------	-----------	-------------	---------	----------------	------------	-------	-------	--------	-----------	--------	---------------	---------	---------	------------	-------	----------	----------	---------	----------	----------	----------	---------	--------	--------------	--------	-----	---------------	-------------	--------------	----------	----------	--------	--------	----------	--------	---------	----------	----------	----------	-----------	---------	---------	---------	----------	--------	------------	----------	---------	------------	----------	---------	---------------	--------

明治3年(4年)の二関村

大島晃一著『一関藩の研究／北奥近世資料の研究』の「大町並図」を参考に書き出した大町(二関村)の生業。()内は明治4年の記録。
※「明治三年六月二関村戸籍家業簿書」と明治四年の「陸中国道并郡二関村戸籍簿改帳」を元に作成されたもの



二関村民は、身分は「百姓」ですが、その多くは兼業農家。左頁で紹介する塩問屋で肝入の佐藤弥三郎も、田畑を所有し、年貢を収めていましたが、遅くとも藩制後期には商業収入の方が上回っていたようです。

後に現在のJR一ノ関駅西口の道路となった